

二〇一一年度

青山学院中等部入学試験問題

国語

注意 ・指示があるまで開いてはいけません。

・答えは解答用紙に書きなさい。

・記号がついているものはすべて記号で書きいれなさい。

・句読点や「」も一字とします。

・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

□ 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

行く

石垣りん

木が

何年も

何十年も

立ちつづけているということに

驚嘆するまでに

④ 私は四十年以上生きてきた。

草が

昼も夜も

その薄く細い葉で

立ちつづけているということに

目を ⑤ までに

さらに何年ついやしたろう。

(1) — ④ 「私は四十年以上生きてきた」から読みとれるのはどれですか。

ア 自分のふがいなさからくる罪悪感

イ 思いがけないことを発見した動揺

ウ 異世界の存在を受け入れる緊張

エ 無意識だったものに守られる安心

⑤ にはどれがあてはまりますか。

ア むける イ こらす ウ つける エ みはる

木は

木だから。

草は

草だから。

認識の出発点は

あのあたりだった。

そこから

すべてのこととすれ違ってきた。

自分の行く先が

見えそうなところまできて

私があわてて立ちどまると

風景に

⑥ 、と

追い立てられた。

(三木卓 編『生命の詩』筑摩書房)

(3) この詩を説明した次の文章について、以下の問いに答えなさい。

木や草が「立ちつづける」姿は、I 自分の姿と重なる。
まわりの事に目もくれず、社会の一員として責任を果たしてきた作者は、II。
「自分の行く先」とは、III を暗に示している。この詩は、年齢を重ねた作者が自身の人生を
ふり返るように IV て作った詩である。

① I にあてはまる文を選びなさい。

ア 休む間もなく人生を歩き続けてきた

イ ゆつくりと単調な毎日を送ってきた

ウ 誰にも頼らず孤立して生きてきた

エ 大自然でいつも光を求めてきた

② II にあてはまる文を選びなさい。

ア 木や草にも生命があり、自分も生かされていると気づく

イ 木や草の存在に気づこう気づこうと必死に努力してきた

ウ 自分自身に精一杯で、木や草に見向きもしなかったと気づく

エ 木を木として、草を草として認識する努力をしてきた

③ III にあてはまる表現を選びなさい。

ア だれもがむかえるべき死 イ 必ずなさねばならぬ使命 ウ 得体の知れない可能性 エ 人生を決める分かれ道

④ IV にあてはまる表現を、詩の中から五字前後で言葉を選び、文章がつながる形に変化させて答えなさい。

⑤ C にはどれがあてはまりますか。

ア にげるな イ 夢見るな ウ ひと休みしろ エ 早く行け

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

セントポーリアという花は④機嫌の難しい花ですから、ちよつと⑤落ちがある、よく咲きません。葉っぱばかりが、どんどのびてきてしまします。それで私は、きれいに咲かせるのが自慢で、誰かにその秘訣を聞いてほしいとも思っていました。わが教え子は、なかなか秘訣を聞いてくれません。「きれいなね、きれいなね」と言うだけで、私が、どういふ秘訣でこれをきれいにしているか聞いてくれないのが、ほんとうに残念だと思ふくらいでした。とうとう、けい子という子が、「先生、あの、セントポーリアの育て方っていうのを、書いたらどう」と言ってくれたのです。「そんなこと書かなくてもいいんだけど、育て方って、やつぱりあるものよ」と言いました。いいあんばいに聞いてくれたのです。「どんなこと？」と。

私の手元には、鉢が五鉢ほどありました。「あのね、どうつてことありませんが、やつぱり、セントポーリアは水の加減が難しい。水をやればいってんでもない。だいたい、やり過ぎが駄目。なんでも、⑥過ぎつていふのは駄目」と、私は待つてましたとばかりに、話し始めました。

それから、その水をやるのを、「一週間に一ぺんやるんですか、十日に一ぺんやるんですか、どっちがいいでしょうか」というような質問を、よく花屋さんなんかに行っている人がいます。すると、花屋さんは花屋さんで⑦、「乾いたらおやりなさい」などと言います。

「乾いたらおやりなさい」これは真理で、やり過ぎにならないことではあります。けれども、五つの鉢に一度に水をやったら駄目に決まっています。今、一番はじめの紫の花にやったらと言つて、ついでに隣にもやろう。これは駄目です。つまり、鉢によつて、土の量が絶対同じつてわけにいきません。また、量は同じぐらゐであつても、同じ⑧になつていくかどうか、わかりません。だから、ついでにやるといふのではなく、一鉢ずつ、今日は、これにやるべきかどうか、ということを考えてやつていかなければ駄目なのです。ちやうど二ついっしょにやつていいときもある

でしょうけれど、一鉢しか、今日、水をやるのが適当でない時もあるので。そういうことをじつと見極めて、やつたりやらなかったりしている

と、私は、なにか⑨教室にいるような、楽しさが湧いてきました。それから、何日に一度なんてきめても駄目です。なぜなら、晴れた日もあるし、雨の日もあるし、暑い日もあるし、寒い日もありますから。どんな天候の中で、ということが、⑩「様でありませんから、一週間に一ぺんずつやればいい、ということ」を言われても、それは違ふのです。私は、そんなことに心をつかうのが楽しくて、「そうだ、今週はこうだったから、もう十日もたつてるけど、やる必要はないな」と思つたり、そういうことを考えていると、なんだか、それこそ、心にパンを食べたような、楽しい気がしてきます。勉強しているような気がするのです。そして、今さらのように、「あれはこうだったな、これはこうだったな」と、教室でしてきたことや、教室の仕事などが、頭に浮かんで、勉強しているときの楽しみが、湧いてくるのです。それで私は、いつも花をいじっているものですか、⑪みなさんから、花が好きだと思われていました。

【中略】

花を見ながら、人間でないものが、どんなふうにも育つものなのか、というようなことを考えるのが、たまらなくおもしろいのです。みなさんもそんなことを考えながら、そうしたものをご覧になったら、また、ちよつとおもしろいかもしれません。そして、ヒヤシンスのようなものが、寒さを経ないで、ずっと暖かにしておくと葉っぱばかり伸びて、花が咲かないということなどが、私は妙に、おもしろくてなりません。そういう花の生活の、植物の生活のすみずみに、⑫人間の育つ秘密がずいぶんあるような気がするのです。

(大村はま『心のパン屋さん』筑摩書房)

- (1) — ①「機嫌の難しい花」とありますが、何が難しいのですか。本文中から指定された字数で書きぬき、次の文を完成させなさい。

水やりの（ひらがな四字）が難しい。

- (2) — ②に入る、体の一部分を表す漢字一字を答えなさい。
 ③「過ぎつていうのは駄目」と同じ意味のことわざを完成させなさい。

過ぎたるは（ひらがな六字）ごとし

- (4) — ④に入る語を選びなさい。

ア 声高に イ 適当に ウ 不親切に エ あからさまに

- (5) — ⑤に入る語を漢字一字で答えなさい。

⑥「教室にいるような、楽しさ」とは次のどれですか。

ア 対象を自由に動かす楽しさ イ 対象の変化を見つめる楽しさ

ウ 対象に動かされることの楽しさ エ 対象から見つめられることの楽しさ

- (7) — ⑦「二様」を、意味を変えずに「様」を使った漢字二字の熟語に言い換えなさい。

⑧「みなさんから、花が好きだと思われていました」とありますが、筆者が本当に好きなものは何ですか、本文下段から一語で答えなさい。

- (9) — ⑨「人間の育つ秘密」について、セントポーリアから見てとれる「人間の育つ秘密」は次のどれですか。

ア 人間の成長に必要なものは、個人差や環境のちがいにより、同じものであっても相手の様子をよく見てあたえなくてはならない。

イ 人間は、厳しい環境を経験せずにめぐまれた環境にばかりいると、身体的な成長はあっても本当の意味での成果はあがらない。

ウ 美しい花を育てようと思ったら、人間には心のパンが必要なように植物に対しては深い愛情と楽しさをもって育てなくてはならない。

エ 花を育てていて迷ったときには花屋に聞くように、人間の成長においても困ったときにはしっかりとその専門家に意見を求めるべきだ。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

ずいぶん前のことになるが、先にも登場していただいた池田弥三郎さんが、新聞に書いておられたことを覚えていいる。「たび」と旅行はちがうというのである。

ようするに昔の旅行と④現代の旅行とは、内容も性格もたいへん違う。それを名づけると、たびと旅行と区別していることができる、という話だ。むかしはそれほど綿密に計画を立てることもなく、ふらつと旅行に出た。目的も厳密にこれこれときめるわけでもない。いくらかでも変更可能だし、行程も伸縮自在である。

ところが昨今、⑤そんな旅行はぜいたくにひとしい。何時何分どこどこ発の列車というふうに乗る物もぜんぶ予約をしなければ移動できないし、いつ、どこに泊まるという計画を立ててホテルを予約しないと、寝るところもない。

その予定の中で、⑥時間を気にしながら行動し、途中でいかに気に入ったところがあっても、いかに気に入るまいと、予定どおりにしか行動できない。

何のことはない。予定をこなすために旅行をしているようなものだ。

あたふたと動き廻り、家にやっとたどりつくとき「ああ、⑦」というのが、みんなの第一声になるらしい。

もつと細かくいうと、目的地でもそうだ。以前展覧会を見にいった時、お目あての画の前には警備員が立っていて、大声で「立ちどまらないでください！」とさけび通していた。

びつくりした。この画を見に来たのではないか。しかも外で何時間も行列をつくって待たされて。歩きながらでしか見られないとなると、見てはいられないではないか。

その点、アメリカの美術館などは何月何日何時というふうに区別して入場券を前売りするから、ゆつくり見られる。

そんな配慮もしないで売れるだけ売っておいて、立ち止まるなどは何事だ！

今や世の中すべてそうだ。三分診察、一分裁判、一〇秒鑑賞——。旅行もこれと⑧百である。バタバタと走りまわって引率されている修学旅行生のかわいそうなことよ。しかし、これほど旅行人口も多くなく、万事ゆったりしていたむかしは、もつと自由があった。

とにかく自分の心と体で動くのだから、相手方の時間に合わせる必要がない。⑨江戸時代になると、さすがに宿屋が商売をはじめて、それなりに旅人があふれると、気に入った宿屋がえらぶようになってくるが、それでも今日の連休のようなものとは、わけがちがう。

宿駅もこまかくできるから、足が達者かどうかでかなり自由がきく。いまの新幹線はビジネス用の列車だが、昔の列車の多くは旅行用の列車だったから、⑩鉄道ができて、まだまだ、たびの気分があった。

私は小学校の五年生のとき、父が東京から広島へ転勤し、一家で広島へ移住した。夜行列車で延々と東海道と山陽道を西下した間の、何と長かったことか。

途中、深夜に列車が駅に止まり、小さくカーテンをあけてのぞいたホームは森閑としてあかりがともっているだけだった

そんなに長い長い行程は、たびというにふさわしい。「お前は旅心を感じたことがあるか」と問われたら、まっ先に、この深夜のホームを見た時の気持ちを思い出す。

それに反して、あつという間に目的地についてしまうのは、とてもありがたいのだが、反面、日常をそのまま持ちこしてしまつて、心に変化がない。

旅衣という優雅なことばもある。旅の服装といったって、そう変わりはないじゃないかということになるが、同じ服でもやはり違う。

毎年「万葉のまほろばを歩く」というツアーを行っていて、私はたくさんの人といっしょに万葉の歌の風土を歩く。ある時、それが終わったへ

あと、参加者が一句をよせてくれた。
まほろばの 旅のなごりの *いのこずち
万葉の原野を歩くうちに、いのこずちが服について、そのまま知らずに
帰宅したのであろう。気がつく、いのこずちがあった。
まさに、⑧これが旅衣だといえるだろう。かりにそれがビジネススー
ツであつてもよい。

*いのこずち … ヒユ科の多年草。

実を包む殻かにトゲがあり、動物や衣服に付着する。

(中西進『日本人の忘れ物2』ウェッジ文庫)

- (1) — ① 「現代の旅行」の目的を本文中から六字で書きぬきなさい。
(2) — ② 「そんな旅行」とはどんな旅行ですか。「旅行」という言葉につながるように本文中から五字で書きぬきなさい。
(3) — ③ ①に「いつも・つねに」の意味があり、反対の意味を持つ漢字の組み合わせ(例…大小 軽重)となる熟語を書き入れなさい。
(4) — ④ ①にあてはまるのはどれですか。
ア 楽しかった イ うまくいった ウ いそがしかった エ のんびりできた
(5) — ⑤ ②に「たいした変わりがないこと。似たりよったり」という意味を持つ漢字五字の言葉を完成させなさい。
(6) — ⑥ 「江戸時代」に書かれた作品をすべて選びなさい。
ア 源氏物語 イ 平家物語 ウ おくのほそ道 エ 竹取物語 オ 舞姫 カ 東海道中膝栗毛
(7) — ⑦ 「鉄道ができて、まだまだ、たびの気分があつた」とありますが、「たびの気分」はどのようなことから感じられますか、本文中から六字で書きぬきなさい。
(8) — ⑧ 「これが旅衣だ」とはどういうことですか。
ア 長い旅にそなえて、十分な服装を用意する。
イ 着の身着のまま、とりあえず旅に出てしまう。
ウ よこれでもやぶけてもいいように、質素な服を着る。
エ 日常では体験できないことが、旅のあかしとして残る。
(9) — ⑨ 「自分の心と体で動く」とはどのようなことですか、三十五〜四十字で説明しなさい。

四

次のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① フエを吹く ② 係をツトめる ③ カモツ列車 ④ ヒタイの汗^{あせ} ⑤ 水分をオギナう

【五】

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

第一次世界大戦中に中国の青島で日本軍とドイツ軍が戦い、敗れたドイツ兵は俘虜（捕虜のこと）として日本国内の施設に收容されました。この物語はその施設での話です。ここではドイツ兵に、様々な経済活動や文化活動といった自由が認められていました。その中で、ドイツ人俘虜と日本人によるフットボールの親善試合が計画されました。フットボールを知らない日本人チームはドイツ人俘虜に指導をしてもらうのですが、関係はうまくいきません。そこで俘虜收容施設の所長である松江が、日本とドイツ両方の責任者を呼びます。

【登場人物】

松江……俘虜收容所所長

石井……通訳

平野……日本人将校。日本のフットボールチームの責任者。

ロレンツ……ドイツ人俘虜。ドイツのフットボールチーム主将。

五月も終わろうとしていた。收容所の樹木には午後の陽の光が跳ねて、どこかでボー、ボーと鳥が鳴いていた。平野中尉はまぶしさに顔をしかめて管理棟の所長室へ歩いていった。ふと脚が止まりかけたのは俘虜のロレンツが来たからだ。こちらの姿を認めて、向こうの歩く速さも少しゆっくりになった。彼等は建物に近づきながら、松江所長が自分達ふたりを同時に呼んだらしいと気がついた。

平野はロレンツがそこにいないかのように、まっすぐ所長室を見据えて建物に入った。ドイツ兵は日本の中尉の①子供っぽいやり方に、心の中で苦笑してあとに続いた。

「平野中尉、入ります」

彼は部屋へ入ると、ロレンツの鼻先でドアを閉めた。少し間があつてノックが聞こえた。

「掛けなさい」

所長の机の前に置かれた椅子をすすめられた二人はとなり合わせにすわった。それでも平野はロレンツの存在に気づかない振りをしていった。

「さて」と松江はいった。「平野君、フットボールのほうはどうかね」

「順調であります」

「専門的な指導者がいないと困るだろう」

「いえ、順調であります」彼はきちんとした姿勢をくずさずにくり返した。

「そうか……。ロレンツ君、もう一度教えてもらうことはできないかね」

松江のかたわらに控えている石井が通訳をした。

「それは彼等次第です」とロレンツが応えた。「最初に言つた通り、彼等

が私の指導に従わない限り、いくら教えたところで効果はありません」

「彼等のどこがいけないのかね。直せるものなら直すようにするが……」

ロレンツは首を振りながらため息をついた。

「まず、平野中尉は私のことを下に見ています。私は俘虜ではありますが、だからといって軽んじられる覚えはありません。それから、これはもつと

②な問題ですが、彼はフットボールをただの遊戯だと考えてます」

平野は通訳の言葉を無表情に聞き流していた。

「どうだね、平野君。彼のいうことは正しいかね」

「すべて③ロレンツの主観であります。自分は彼を見下したことも、フツ

トボールを見下したこともありません」

「平野中尉は」とロレンツがいった。「フットボールが我々にとってどう

いうものなのか、よく分かつてません。フットボールが我々にとってどう

我々は戦時俘虜です。松江所長の寛大さによって、大きな自由を与えら

れてますが、囚われの身であることに変わりはありません。しかしフット

ボールをしている時、我々はただの選手になることができます。

また、收容所にいるあいだ、我々ができることは限られています。その中

でフットボールは、少なくとも私にとつて最良のものです。いまの私には、

いや、おそらくフットボールをしている多くの俘虜には、フットボールは

生きる

平野中尉はそれを理解してない。どこかにただの遊戯だと見下したところがあつて、それが私をいら立たせるんです」

「㊦であります。ただの言い掛かりであります」平野はあいかわらず平然と応えた。

松江は二人をじつと見つめて、しばらく何か考えるように沈黙した。そして、

「ロレンツ君、ありがとう。彼と話し合つてみる」と手を差し出した。ロレンツは握手をして部屋を出て行つた。

【中略】

松江は平野を収容所が見渡せる高台に連れて行き、話し始める。

「君は戦に負けた者の気持ちが分かるか？」と訊いた。

「経験がありませんから、よくは分かりません」平野は唐突な問いかけに口ごもつた。

「自分の父は会津藩の出身だ。維新の折に、最後まで幕府と戦つて負けた。勝てば㊦というが、実際その通りだったよ。負けた会津藩は、草すら生えない不毛の地に追いやられて悲惨な思いをした。戦は勝つものだ。負け戦はするもんじゃない。

しかし戦である以上は勝ち負けがある。最悪の状況に備えるのが賢人だ。我々軍人は負けた時のことを考えなきゃいかん」

「お言葉ですが、㊦負けた時の身の処し方は一つです」

「まあ聞きなさい」松江は苦笑しながら、いきりたつ若い将校を制した。「自分がいつてるのは理屈じゃない。㊦戦争の現実なんだ。いいか、青島のドイツ軍は死力を尽くしたといつていい。しかし我々の、いわば物量に負けた。そして俘虜として、この収容所に送られて来た。

自分はここの所長になるまで、ドイツ人とは接したことがなかった。帝国陸軍がドイツから大きな恩恵をこうむつたことは知ってるから、力のある国だとは思つてたが、ここでドイツ人と接して、あらためて感心した。

君は、いつかいったことがある。もし負け戦をして虜囚となるぐらいなら腹を切る——確かにそれも一つの考え方だろう。だが、ドイツ人の態度を見ると、これも㊦立派な身の処し方だと思う」

「彼等は生きることと恋々としてるだけです」

「君は命が惜しくないかね」

「帝国軍人として、いつでもお国のために捨てる覚悟はできております」
「そうか。立派だな。だが、問題は捨て方だ。つまらない死に方は犬死だぞ。

……自分は時々こうして俘虜の生活を眺めてみる。彼等は偉いと思う。軍人として、戦に負けて平然としていられるはずがない。彼等だって戦場では命を的にして戦つたんだ。彼等も苦しんでる。だから必死に生きようとしての。㊦顔を伏せそうになる自分と戦つてる。

健康組合をつくつて、職人としての技術を腐らせず、楽団で魂を鼓吹して、講演会を開いて自分を高めて、運動で体を鍛えて——私はその態度に胸を打たれる。

これが日本人だったらどうかね。ここまでできるかね。腹を切るのは勇ましいかも知れない。しかしある意味、簡単だよ。それで終わりだからね。ところが生きることは大変だ。毎日、毎日、同じことを繰り返さなければならぬ。彼等は俘虜になつて何年になると思う？ 戦に負けて、ひるみそうになる自分を奮い起こして、倦まず弛まず、丁寧に生活する——私はこれだつて充分に英雄的な行為だと思ふがね」

「自分にはよく分かりません」

「君は、幼年学校、士官学校を優秀な成績で卒業した、いわば選良だ。胆もすわつてる。軍人として、これから日本を支える立場になる人物だと思う。だからこそ、あえていいたい。頭を下げて㊦勝つことを憶えなさい。誇りを捨てよ、というのではない。勝つためにしたたかなになれる、ということだ。優れた者からは謙虚に学べ、ということだ。ここの俘虜は頭を下げる価値のある相手だと思うがね」

(村上政彦『ハンスの林檎』潮出版社)

- 9 -